

イヌワシ (学名: *Aquila chrysaetos*)

(写真・文 太田祥作)

[タカ目タカ科]



▲成鳥雄／2020年8月、町内撮影。山地の斜面上空を旋回した後、滑翔して稜線の先に消えた

▲若鳥／2020年9月、町内撮影。翼や尾羽の白斑は、幼鳥から生後5年目の若鳥まで見られる特徴

イヌワシは北半球に広く分布する大型の猛禽類で、日本では北海道から九州の山岳地帯に留鳥として分布しています。

1つがいの行動圏は平均で約60km、広いものでは250kmにまで及び、警戒心も強いいため観察は容易ではありません。繁殖活動は晩秋から本格化し、急峻な岩棚に営巣します。厳冬期の2月頃に産卵し、抱卵は雌が行い、約40日～45日後に2羽の雛が孵ります。しかし、兄弟間の闘争により通常1羽しか巣立ちません。雛が一定の大きさになるまで主に雌が抱雛し、狩りを担う雄はノウサギやヤマドリ、ヘビ類等の餌を巣へ運び込みます。雛の巣立ちは概ね6月上旬頃で、しばらく親子3羽で家族期を過ごした後、秋には親鳥に追い出される形で雛が独立します。

現在日本のイヌワシの生息数は約500羽、つがい数は約200と極めて少ないことに加え、近年は繁殖成功率が落ち込んでおり、絶滅の危険が増大しています。その主な要因として、イヌワシが狩場として利用していた採草地や牧草地、夏緑広葉樹林のような開放地が、戦後の拡大造林を経て鬱閉した人工林に置き換わったことで、狩場が少なくなり餌不足に陥っていることなどが考えられています。最新の環境省レッドリストでは絶滅危惧IB類、ふくしまレッドリストでは野生下で最も危険度の大きい絶滅危惧IA類に選定されています。

只見町では1992年に初めて雛の巣立ちが確認されました。これは福島県における最初の繁殖成功例とされます。只見町の山岳部に多い雪食地形や露岩地帯、ブナを主体とした夏緑広葉樹林帯は、イヌワシの生息に必要な狩場や営巣環境を提供していると考えられ、この町における原生的な自然環境を指標する種であると捉えることができます。

只見町ブナセンターからのお知らせ

只見町ブナセンター附属施設「ただみ・ブナと川のミュージアム」では下記企画展を開催中です。皆様のお越しをお待ちしております。
企画展アーカイブ「只見の天然資源とその利用～冬の暮らしと手仕事編～」
会期：2020年12月19日(土)～2021年3月29日(月)
場所：ただみ・ブナと川のミュージアム 2階ギャラリー